

シネマ日記



No. 70

○月×日 北陸のある刑務所で、刑務官としての定年後も囑託として木工の指導をしている主人公（高倉健）のもとに、亡き妻（田中裕子）の残した絵手紙がある人を介して届く。「一羽の雀の絵とともに」「故郷の海を訪ね、散骨してほしい」との思いが記されていた。長年穏やかに幸せに暮らしてきた夫婦。お互いを理解し合えてきたと思っていたのに、妻は生前、一言もそんなことを言っていなかった。「一体、なぜ」と思いながらも、愛妻の願いをかなえるために、遺骨とともにキャンピングカーでの富山から長崎県平戸への旅が始まる。：。「あなたへ」（降旗康男監督）は、しみじみと

した夫婦愛と人の世の切なさ、生きることへの哀しさが淡々と綴られる。10日間ほどの旅にも思わぬ人たちに出くわすのだが、皆それぞれの事情を抱え、生きる哀しみを背負った人たちだ。妻と知り合ったのは、彼女が刑務所に慰問に来た歌手（ただし無名の）だったからだが、主人公がたどり着いた妻の故郷で、写真館に飾られていた古ぼけた一枚の写真が目止まる。小さなステージで一人の少女が歌っている姿だ。そのとき彼は、妻の願いの意味がはつきりわかったのだった。果たせなかった歌手への夢、故郷に錦を、である。そして、散骨のため小舟を出してくれた老漁師（大滝秀治は、主人公に「久しぶりに、きれいな海は見た」とつぶやく。この映画のすべての思いが、そのせりふに込められているように思えた。劇中、ある「違法行為」によって意外な展開を見せるエピソードが加えられているのだが、「人はいいことをするために、悪いこともする」のだというメッセージにほかならない。高倉

81歳、降旗78歳、この主役と監督のコンビで20作目。高倉はインタビュで「哀しさを演じたい」と語っていたが、彼らのコンビ作品に一貫して流れているもので、本作でも、その哀しみ、切なさの中にも、生きる希望が立ちのほり、しんみりと深い感動が襲ってくる。○月×日 火事で店を失った若い夫婦（阿部サダヲ、松たか子）がその資金集めのために結婚詐欺を思いつく。「夢売るふたり」（西川美和監督）は、夫が結婚願望の女性たちに近づき、結婚話を餌にカネを巻き上げていく。裏で袖を引くのは妻のほうだから、男女が逆になった現代版美人局。東京の片隅には孤独の女が溢れており、彼女たちは寂しげで優しげな夫に心を許し、貢ぎ始めるのに時間はかからない。一方の妻は結婚を夢見させる筋書まで書き、冷徹そのもの。夫がだまし取った金をひたすら貯めこむ。しかし、夫婦の心にひびが入り始める。夫は妻をなじる。「お前の気持ちちはもはや俺への愛でもなく、店を開きたいわけでもなか

女たちというか、世間への復讐たい」と。そのときの妻の深い闇を見つめるような大きな瞳……。都会という現代砂漠に、騙すほうも騙されるほうも同じ女という生き物の欲求不満、渴き。ただ、そうした女たちの揺れ動く心理を描く際のまなざしはあくまで優しい。女性監督ならでは、だろう。さて、結婚詐欺の結末は……。○月×日 交通事故で首から下がマヒした大富豪の介護人として、刑務所経験のある黒人青年が雇われた上品と下品さのギャップに随所で笑いを誘いながら、二人は本音をぶつけ合うことで、お互いの理解と信頼を勝ち得ていく。あまりに対照的であるが故に「最強のふたり」（仏、トレタノとナカシユの共同監督）になる様は感動もの。嘘のような話だが、実話だそう。○月×日 「天地明察」（滝田洋二郎監督）は日本初の歴を作った江戸の天文学者・安井算哲の生涯を描く。地味な人物を勇気に満ちた感動の娯楽大作に仕上げた監督の手腕はさすが。久石譲の音楽もよい。（内藤哲